

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24531117

研究課題名(和文) 国際移動する子ども・若者の音楽的アイデンティティ形成と学校音楽教育の国際比較

研究課題名(英文) The international comparison of the transformation of musical identity in children and youth accompanying international migration

研究代表者

杉江 淑子 (SUGIE, Yoshiko)

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：30172828

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：国際移動が子ども・若者の音楽的アイデンティティ形成にどう作用するかを文化の継承・変容・複合化の観点から探り、日本の学校音楽教育の課題を明らかにすることを目的に研究を進めた。

研究を通して示唆されたのは、国際移動の背景をもつニューカマーの子どもは日常生活においても「家庭と学校」「家族と友だち」等の中で頻繁に文化間移動を経験しており、そこでは家族で共有できる歌の記憶が子どもたちの文化的安定性の面で大きな意味をもつことである。そこで、ドイツ等の先行事例を参考にしながら、ニューカマーの子どもの家庭の音楽文化とのつながりを考慮した音楽(子どもの歌)の教材化を試行した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to inquire about how the musical identity of children accompanying international migration has been formed and to clarify the problem to be solved. According to the research, we derived a hypothesis that the music culture of the newcomers' children grown up in Japan are very different from their parents' and grandparents' music culture because of the combination of generation gap and linguistic and cultural gap. As a consequence the newcomers' children experience coming and going between two cultures, such as "school and home", or "friends and family". As a result, cultural identity of the children seem to be unstable. Therefore "sharing music in family" is important for the children to ensure stability of their cultural identity. This research attempted to introduce the child songs of their homeland as the teaching materials for school music education, while referring to the previous challenge of German music education for Turkish immigrants.

研究分野：音楽教育学，音楽科教育，教育社会学

キーワード：国際移動 文化的アイデンティティ ニューカマー ドイツのトルコ系移民 多文化教育 国際理解教育 音楽教育 文化間移動

1. 研究開始当初の背景

日本における在留外国人の数は 1980 年代後半以降増加し続け、複数の言語的・文化的背景を有する子どもが、日本の学校で学び日本社会で生活している。さらに今後は人々の国際移動が頻繁になり、成長段階で複数の文化間を移動する子どもの数は確実に増えていくと思われる。このように国際化しつつある地域社会の学校にとって、外国から来た、或いは外国にルーツをもつ子どもへの教育支援を積極的に行いながら、日本人の子どもを含めたすべての児童生徒に対する国際理解教育、多文化共生教育を推進していくことは、必須の課題である。

こうした状況に対する教育支援策として、日本の学校では「日本語指導」を中心とした言語領域における指導、および国語、算数、理科、社会科等の認知的教科の領域における指導や支援が主に行われてきた。しかし、子どもの文化的アイデンティティの形成には、感性に直接関わる音楽等の非言語的な領域も深く関わっている。それゆえ、多文化化する社会において、異なった文化背景をもつ者同士が相互に理解し合うためには、感性の部分での共感、理解といったことが必要になる。しかしながら、音楽に対する感性は可視的でないだけに、教育実践の場においては等閑視されやすい。

一方、歴史的な大量移民受け入れ国であるオーストラリア、カナダ、アメリカ合衆国や、第 2 次世界大戦後、移民受け入れ国となったヨーロッパ諸国においては、音楽教育の分野においても多文化教育の研究が進められてきた。また、日本においても、多文化的な視点に立った音楽教育の教材開発や指導方法についての研究や実践の提案が行われてきた。ただし、これらの先行研究、とりわけ日本における研究は、学校音楽教育一般を対象としたものであり、日本の学校や地域社会そのものが多文化化しているという現状を必ずしも想定した研究ではなかった。それゆえ、多文化化が進展している具体的な学校環境下での音楽教育の現状把握と、それを踏まえた音楽教材や指導法の研究を進める必要があるという問題意識の下に、研究に着手することとなった。

本研究に先立ち、研究代表者 杉江淑子は、平成 21～23 年度科研費研究「ニューカマー児童生徒の音楽的アイデンティティ形成の実態を踏まえた音楽教材の開発」において、日本の学校に通う日系ニューカマーの子どもとの関わりに関する質問紙調査及び子どもたちの母親に対するインタビュー調査を実施し、国境を越えた家族移動に伴う親世代の思いと日本のマス・メ

ディア等の影響を多大に受けて育った子どもたちとの間のギャップの大きさを知ることとなった。そして、国際移動により複数の文化的背景をもつ子ども・若者のアイデンティティ形成については、保護者世代以前に遡った個々の事例研究を積み重ねていく必要性を指摘した。また、1980 年代後半以降のニューカマー外国人の急増という日本の状況は、ドイツにおける 1960 年代以降のトルコ系外国人労働者受入れの状況と似ていることから、ドイツにおける異文化間音楽教育の理論的進展についての研究に着手していた宮本賢二郎を研究協力者として加え、本研究を開始した。

2. 研究の目的

国際移動が子ども・若者の音楽的アイデンティティ形成にどう作用するかを文化の継承・変容・複合化の観点から探り、多文化化しつつある日本における学校音楽教育の課題を国際理解教育の観点から明らかにすることを目的に、以下の計画を立てた。

- (1) 1960 年代末以降ドイツの異文化間音楽教育・多文化音楽教育の理論および実践事例、成果と課題の検討
- (2) 日本在住ニューカマーの子ども・若者の音楽的アイデンティティ形成過程の調査
- (3) 多文化音楽教育に関わる基礎的データの収集・分析と、それにもとづく学校音楽教育の教材・指導方法の試行的提示。

3. 研究の方法

研究の方法は次のとおりである。

- (1) ドイツの異文化間音楽教育・多文化音楽教育の理論と実践の検討
 - ① 理論的変遷の整理
 - ② 教科書、教育参考書、教材集などによる実践事例の収集と検討
- (2) 日本在住ニューカマーの子ども・若者の音楽的アイデンティティ形成過程の調査
 - ① 聞き取り調査に基づく家族及び本人のライフ・ヒストリーの作成と音楽文化の分析
- (3) ニューカマーの出身国の歌・音楽の収集と教材化に向けての調査
 - ① 保護者対象の質問紙調査の実施
 - ② 出身国の子どもの歌の収集
 - ③ 試行的教材化と活動プランの作成

4. 研究成果

(1) ドイツの異文化間音楽教育・多文化音楽教育の理論と実践の検討

ドイツは 1960 年代に、戦後の労働力不足を補うために外国人労働者を大量に受入れた。その多数を占めたトルコ人労働者は、70 年代にドイツが外国人労働者受入政策を変更した後も増加の一途を辿った。ガスト・アルバイター (Gastarbeiter)、すなわ

ち労働力不足を補う一時的な労働者として位置づけられていたトルコ人労働者であったが、70年代には家族の呼び寄せを伴うドイツ社会への定住が進み、子どもたちがドイツの学校に通い始めることとなった。

この1960年代から80年代にかけてのドイツにおけるトルコ人労働者の受入れやその後の政策は、90年代以降、日本が外国人労働者を大量に受入れて後に辿った経過と似るところが多い。ドイツにおけるトルコ系移民の場合、宗教の違いが大きな課題となること、日本で90年代以降大量に受入れた外国人労働者は日系であるという制約があったことなどの重要な相違点はあるが、工業化社会の中で労働力不足を補うために、受入れ対象国を絞って経済政策として外国人労働者の受入れを急速に進めた点、その後国内の経済状態の減衰により帰国奨励などの政策に転じた点、そうした政策転換にもかかわらず、定住化傾向が続いている点など、共通する部分が少なくない。

研究協力者 宮本によれば、外国人労働者の子どもがドイツの学校に通い始めた1970年代においては、ドイツ各州の基礎学校低学年(Grundschulhe Primarstufe)のための学習指導要領には外国人児童の存在や、その文化的背景を扱うことについての記述は見あたらず、「異国の文化を理解する」という項目はあっても、採用される教材はよく知られたイギリス民謡であるなど、外国人労働者の子どもとは無縁のものであった。ドイツ各州の指導要領に、外国人児童についての記述が加えられるようになったのは1978年以降であり、「トルコの歌」を扱うことは1980年にラインラント・プファルツ州の指導要領において推奨されたのが初期である(宮本 2013,53)。

一方、ドイツにおいて出版された教科書・教材及び大学・学校での授業実践研究から探ると、外国人労働者がドイツに定住を始めた70年代に既に複数の音楽教科書がその子どもたちの音楽を扱っていたこと、また複数の大学でドイツのトルコ人の音楽文化についてのフィールドワーク調査やその成果を踏まえた授業実践研究が行われていたことが明らかとなった。宮本は、この時期に出版された教科書・教材及び授業実践研究についてMerkt(1981,1983,1993)を参照しつつ検討し、以下のように総括した。

①Merkt(1983)は1980年までの実践研究の経験から、「音楽体験」を通しての感情的、社会的な学習を「認知的学習」に優先させるべきであると主張し、またトルコ人児童がドイツ人児童と対等な立場で能力を示すことができるような

素材の選択と構成を提言している。

②このMerktの主張は、同時代の、鑑賞や理性的な説明、或いは情報の提供だけではトルコ音楽に対する偏見を取り除くことができないとする報告(Reiche 1980, Daschner 1981, Breckhoff 1982)や、共通の音楽体験の必要性の指摘(Daschner 1981)に合致する。

③他方、情報を中心とした認知的な学習は決して一方的に否定されるものではなく、音楽体験を通じて共感が生まれた後の段階としては有効な教授法であろう。扱われる音楽とその内容については、子どもの発達に十分な配慮が行われる必要がある。またMerktの主張も排他的選択ではなく「音楽体験」の優先である。

④「音楽体験と共感」をベースとし、認知的学習を加味し、より深い理解を目指す教授法としてMerkt(1993)により「インターフェース法」が提唱されたが、その成立・実践の方法についてはさらなる研究が必要である。(宮本 2013,58-59)

1980年以降のドイツでは、外国人児童のための教育という課題に加え、若者の様々な音楽文化を扱うという意味での「多文化音楽教育」の要素が加わった。とりわけ1990年の東西ドイツの統合以降の政治難民の流入は、ドイツ社会を本格的な多文化社会へと移行させることとなった。さらに近年の中東からの難民受入れにより、ドイツの移民社会の多文化化はますます進行するであろう。したがってドイツにおいてはトルコ系移民の子どもを対象とした異文化間音楽教育の研究から、近年は、より多文化化した状況に合わせた研究へと向かいつつある。しかし、ドイツの異文化間音楽教育における「音楽体験による感情的な理解」の重視は、他の認知的な領域の学習とは異なる音楽による学習の独自性を認めるものであり(宮本 2013,59)、多文化社会に適合した音楽教育を構想する際にも重要な視点であることを付け加えておきたい。

日本でも近年、南米のみでなく、フィリピン、中国からの移住者による多文化状況があることから、ドイツの事例については今後も追跡し検討を続ける必要がある。

(2)日本在住ニューカマーの子ども・若者の音楽的アイデンティティ形成過程の調査・分析

学校教育のなかで、音楽は、教科として位置づけられると同時に、学校行事等、授業以外のさまざまな場面においても使用される。音楽は、非言語的であり、感性と直接に結びつく表現領域に属するとされる一方で、歌には歌詞がつき、言語との関係は

きわめて深い。すなわち、音楽は言語的・非言語的の両面から、人々の文化的アイデンティティの形成に強く関わる領域である。それゆえ、学校音楽教育の研究や実践においても、複数の言語的・文化的背景をもつ子どもがどのように自己の音楽的アイデンティティを形成し、変容させていくのか、また複数の言語的・文化的背景をもつ子どもが在籍するという状況を活かして、どのような音楽教育の可能性が考えられるかといった視点は重要である（杉江 2015, 1）。

こうした問題意識のもとに、杉江は、①日系ニューカマーの子どもたちの音楽的アイデンティティはどのように形成されるのか、②家族の国際移動は子どもの音楽的アイデンティティの形成にどう影響を与えるか、といった観点から研究を継続してきた。

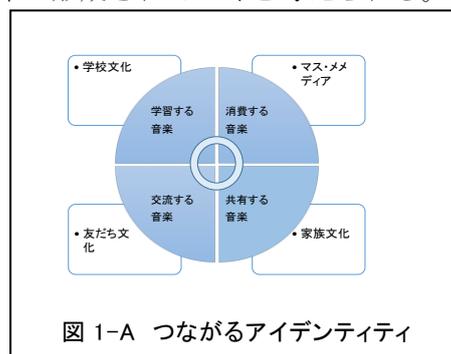
まず、S 県 K 市の公立小学校に通う日系ニューカマーの子どもを対象とした質問紙調査から、子どもの日常生活における音楽との関わりに関して次の傾向を見出した。

- ①テレビ等のマス・メディアを通しての音楽の影響力がきわめて大きく、J ポップ系のアイドルグループやアニメ番組のテーマソング等は、ニューカマーの子どもにも絶大な人気がある。この点では、日本の子どもたちとの違いはない。
- ②加えて、ニューカマーの子どもの場合、日本語以外の言語で歌われる海外のポピュラー音楽への嗜好の広がりや低い年齢層からみられ、「日本」や「日本語」といった要素にさほど制限を受けていないとも解釈できる。
- ③出身国の子どもの伝承歌、遊び歌などマス・メディアにのらない歌、あるいは出身国の子ども向けテレビ番組の歌も、家庭の中である程度伝えられてはいる。
- ④しかし、出身国の子どもの歌は、ニューカマーの家庭内或いはコミュニティ内の文化として留まっていて、外の社会に出たときには、子どもたちの嗜好や意識の表面に上ることは少なく、周辺的な位置に置かれやすい。（杉江 2013）

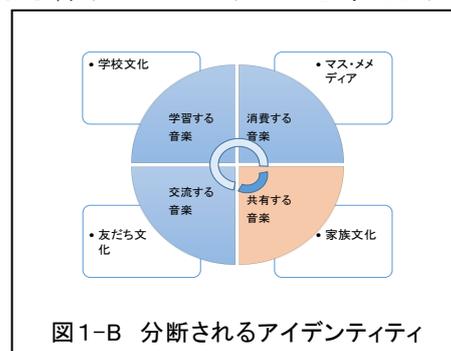
以上の結果と親世代への聞き取り調査から、国際移動を経験しているニューカマーの子どもは、日本社会における日常生活空間においても、「家庭と学校」あるいは、「家族と友だち」との間で頻繁な文化間移動を経験しており、そのことがアイデンティティの分断や揺らぎにつながりやすいのではないかという仮説を引き出した。

現代の子どもをとりまく音楽環境は大きく、学校、友だち、マス・メディア、家庭の4つの場または媒体に分けることができる。子どもはこの4つに代表される複数の

場面・媒体を通して音楽と関わり合う。そしてその多様な関わり合いが個々の子どもの中で図1-Aのように統合されることによって、安定性のある音楽的アイデンティティが形成されていくと考えられる。



しかし、ニューカマーの子どもの場合、学校、友だち、マス・メディアの3つはつながっても、家庭の中で共有される音楽文化とその外部にある音楽文化とは図1-Bのように切り離されがちである。そのため、日常生活において2つの文化の間を移動せざるを得ないのではないかと考えられる。



さらにこの仮説に関連する下位の仮説として、以下の3点を加えた。

- ①日系ニューカマーの子どもの音楽文化は、国際移動による言語的・文化的ギャップと世代間ギャップが混ざり合い、親や祖父母世代とは大きく異なっている。
- ②ニューカマーの子どもは、①のギャップが大きいほど、日本社会においても、家庭・家族と学校・友だちとの間で頻繁な文化間移動を経験し、文化的アイデンティティの揺らぎや不安定につながる。
- ③文化的アイデンティティの揺らぎや不安定の程度は、日系ニューカマーの両親の国（文化）の組み合わせ、外見的特徴、言語環境、家庭環境、学校環境、国際移動を経験した年齢や移動の頻度、滞在期間等によっても異なる。（杉江 2015,2-3）

本研究では、以上の仮説にもとづき、ブラジルから移住した日系ニューカマーの保護者、親子、家族に対するインタビュー調査を実施した。先行の調査も含め本研究で実施したインタビュー調査の協力者は13名である。その中から特に親子、家族単位

でインタビューを行った3ケースの調査記録から、日系ニューカマーの各家族の歴史的背景、使用言語、受けた教育について概観するとともに、各世代の音楽文化について、①ブラジルの日系人社会における音楽文化、②ブラジルにおける日系ブラジル人の文化間移動、③日本における日系ニューカマーの子どもの音楽空間、④ベース言語と歌、⑤親子、家族との会話を通してよみがえる歌の記憶、という5つの観点から分析・考察した(杉江 2015)。

ケース・スタディから見出された重要な点は、子どものベース言語が彼/彼女らの音楽的記憶に少なからず影響を与えていること、子どもの幼い頃に母親(父親)が歌って聴かせた歌は子どもの日常生活においては意識下に潜在しており、こうした歌の記憶はきっかけがあれば家族の会話を通してよみがえり、家族で共有される音楽文化として認識されうることである。国際移動の経験をもち、そのために日常生活において文化間移動を余儀なくされる日系ニューカマーの子どもにとって、家族で共有できる歌の記憶があることは文化的安定性の上で大きな意味をもつ。とりわけ親世代の日本語会話力が十分でない家族の場合、歌や音楽は家族が共有する文化として重要な位置を占めるといえよう(杉江 2015,18-22)。

本ケース・スタディにおいては、世代を遡った家族の歴史的背景を背景として置き、日系ニューカマーの音楽的アイデンティティの形成と変容の様相を探ることに焦点を定めた。その結果、家族の会話を通して呼び起こされる歌の記憶、すなわち「家族で共有される音楽文化」にハイライトが当たることとなった。今後の課題として、「学校」で学習する音楽、「マス・メディア」を通して消費する音楽、「友だち」と交流する音楽といった視点を加え、それらが家庭の音楽文化とどうつながっていくのか、それぞれの子どもの音楽的アイデンティティとして、どのように統合されうるのかについて考察していくことが必要である。

(3)ニューカマーの出身国の歌・音楽の収集と教材化に向けての調査

日常生活の中で文化間移動を余儀なくされる子どもたちにとって家族で共有できる歌・音楽の存在は文化的安定性の上で大きな意味をもつ。さらに彼らの家庭の音楽文化が「友だち」「学校」といった家庭外の音楽文化との間で分断されることなく、個々の子どもの内で統合されることが安定したアイデンティティの形成につながっていくと考えられる(図1-B)。したがって、ニューカマーの子どもの家族(或いはコミ

ュニティ)で共有される歌・音楽を学校の音楽科や国際理解教育の場において取り上げることの意義は大きい。多文化化する学校教育において、ドイツの異文化間音楽教育・多文化音楽教育の実践からも見出された「音楽体験による感情的な理解」の有効性は極めて大きいと考えられるからである。

そこで本研究では、ニューカマーとして在住人口の多いブラジルの子どもの歌を収集し整理・分析するとともに、その中から音楽科の授業や国際理解教育の活動において教材となりうるものを選択するために、日系ブラジル人の子どもの保護者を対象とした質問紙調査を実施した。

質問紙は日本語版とポルトガル語版の両方を作成し、S県N市において子どもを地域の公立学校に通わせている日系ブラジル人の母親の集まりの際に配付し10名から回答を得た他、国内のブラジル人学校36校に郵送で協力を依頼し、45名の回答を得た。合計55名の回答者の性別は3名が男性、52名が女性であり、母親の回答が多数を占めている。回答者の平均年齢は38歳である。回答者の家庭での使用言語は、ポルトガル語が35名、日本語が2名、ポルトガル語・日本語の両方を使うがポルトガル語が主という回答が12名、その他と不明を合わせて6名であり、ポルトガル語を使用している家庭が大多数である。

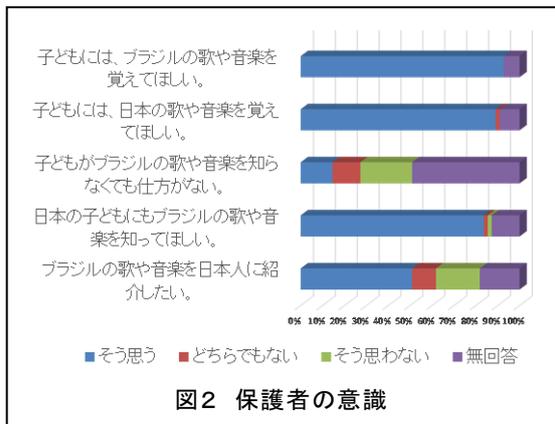
質問紙では、収集したブラジルの子どもの歌60曲の歌の題名と歌い出しの歌詞のリストを示し、それぞれの歌について「1. ローズさめる」「2. 聴いたことがある」「3. 知らない」から該当するものの回答を求めた。また、その中から子どもたちに特に伝えたいと思う歌を選んでもらった。

60曲の中で80%以上の回答者が「1. ローズさめる」と回答した曲は、〈Ó ciranda, cirandinha〉〈O gato〉〈Marcha soldado〉〈Piolito〉〈Boi da cara preta〉〈O Sapo Não Lava o Pé〉〈Nesta rua mora um anjo〉〈Os escravos de Job〉の8曲であり、これらは子どもたちに伝えたい歌としても選択率の高い歌であった。この8曲以外に半数以上の回答者が「1. ローズさめる」と回答した曲目が17曲あり、質問紙調査に挙げた60曲中25曲は日本に住む日系ブラジル人の子どもの親世代によく知られている歌であった。これらの歌は日系ブラジル人家族の中で共有されうる歌であることから、教材化の対象となりうると思った。

質問紙には、さらに保護者が子どもの歌や音楽に関してどのように考えているかを探るために、次の5つの質問を設けた。

①子どもにはブラジルの歌や音楽を覚えて

ほしい。②子どもには日本の歌や音楽を覚えてほしい。③子どもがブラジルの歌や音楽を知らなくても仕方がない。④日本の子どもたちにもブラジルの歌や音楽を知ってほしい。⑤チャンスがあれば、ブラジルの歌や音楽を日本人に紹介したい。



回答をみると、図2に示されるように、大多数の回答者が、自分の子どもにはブラジルの歌や音楽も日本の歌や音楽も覚えてほしいと考えており、また、日本の子どもにもブラジルの歌や音楽を知ってほしいと思っている。しかし一方で、「チャンスがあればブラジルの歌や音楽を日本人に紹介したい」と回答した者は半数程度であり、積極的にブラジルの歌・音楽を日本人に発信していくことにはためらいがみられる。このような迷いやためらいは、自分の子どもが「ブラジルの歌や音楽を知らなくても仕方がない」と思うかという質問に対して、半数近くが無回答であり、「そう思う」が8名、「どちらでもない」が7名という回答分布からも推察できる。出身国であるブラジルの歌・音楽を自分の子どもには覚えてほしいし、日本の子どもにも知ってほしいという思いはあるものの、現状では難しいという感情を保護者たちがもっていることがうかがえる。

このことから、学校教育において、外国人（外国につながる）児童生徒の出身国の歌を日本人の子どもと一緒に歌ったり、その歌を用いて遊んだりする場を意図的に設定することは、子どもの安定したアイデンティティを形成する上で必要であり有効なのではないかと考える。

質問紙調査において、回答者数人から遊びを伴った歌の遊び方の記載があった。これらを参考にしながら、日系ブラジル人の大多数が知っており、かつ子どもたちに伝えたいと考えている上位8曲（上述）について教材としての可能性を探り、学校における活動プランを試行的に作成した。

(4) おわりに

本研究においては、国際移動をする子ども・若者の音楽的アイデンティティ形成について探るとともに、移民受け入れ先進国であるドイツの異文化間音楽教育・多文化音楽教育の事例を参照しながら、学校音楽教育の関与の可能性を検討した。文化間移動を余儀なくされる移民第一世代や第二世代

の子ども家族の音楽文化が、「音楽の体験による共感」によって学校や友だちなど家庭の外につながっていくことは、子どもたちのアイデンティティの統合や安定化をもたらす。そこに学校音楽教育が寄与できる可能性は大きいと考える。

調査対象が主に日系ブラジル人の子どもとその保護者に限られたこと、作成したプランにもとづいた授業や活動の実践研究が残されたことを今後の課題とし、研究を継続していく計画である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

①杉江淑子 2015 「国際移動する子どもの音楽的アイデンティティの形成と変容—日系ニューカマーの家族のケース・スタディより—」『関西楽理研究』Vol.32、1-24.

②杉江淑子 2013 「日本の学校に通う日系ニューカマーの子どもたちの文化間移動と音楽的アイデンティティの形成」『関西楽理研究』Vol.30、214-224.

③宮本賢二郎 2013 「ドイツにおけるトルコ人移民の子どものための音楽授業—Merkt による1970年代から1980年代初頭の基礎学校の教材・授業研究を中心に—」『音楽表現学』Vol.11、51-60.

〔学会発表〕(計5件)

①SUGIE, Yoshiko. The Transformation of Musical Identity in Children and Their Families Accompany International Migration: Case Study of *Nikkei* Newcomers, The 10th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research, Hong Kong, 2015年7月12日.

②杉江淑子 「日系ニューカマーの音楽空間—日本在住ブラジル人における「ブラジルの子どもの歌」の受容—」日本音楽表現学会第13回(美ら島)大会, 沖縄県立芸術大学, 2015年6月.

③杉江淑子 「日系ニューカマーの子どもたちの音楽的アイデンティティ形成—保護者世代・若者世代のケース・スタディより—」日本音楽教育学会第44回大会, 弘前大学, 2013年10月13日.

④SUGIE, Yoshiko. The formation of musical identity of *Nikkei* newcomers' children enrolled in Japanese schools, The 9th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research, Singapore, 2013年7月18日.

⑤杉江淑子 「日本の学校に通う日系ニューカマーの子どもと音楽—国境を越えた移動と音楽的アイデンティティの形成」日本音楽教育学会第43回大会, 東京音楽大学, 2012年10月8日.

6. 研究組織

(1)研究代表者

杉江 淑子 (SUGIE, Yoshiko)
滋賀大学・教育学部・教授
研究者番号: 30172828

(2)研究協力者

宮本 賢二郎 (Miyamoto, Kenjiro)
浜松学芸高校・教諭